

『在宅ケアのはぐくむ力』 教員が学生に「訪問看護」の イメージを伝える手助けに

著：秋山正子／定価：1,470 円(本体 1,400 円＋税 5%)
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



「在宅ケアの力」シリーズ「不思議な力」「つながる力」に続く第3作である。

第1章では、高齢化が進む団地に「暮らしの保健室」を開き、その活動を通してこれから地域で安心して暮らすために必要なものとして、「安心を与えられるつながり」と自分の「今」を認めてくれる聞き役の重要性を述べている。第2章では、最近特に重要視されてきている「退院支援」についていろいろな事例を通して、病院と在宅をいかにつないでいくか、第3章では他職種とともに学び・はぐくみ合うことの大切さを語っている。そして、第4章は退院調整に関して先駆的にがんばっている宇都宮宏子氏や訪問看護空白地にステーションを立ち上げた横山孝子氏と、病院、在宅の垣根を越えたトークで現状の課題にふれている。

またコラムとして、看護師長だった小川香代子さんによる「がんの患者に対して行ってもらいたい看護」20 か条がある。これは大腸がん闘病の後、自宅で家族に看取られた小川さんの著書のなかから秋山さんが取り上げたもので、読むと今自分が行っている看護ケアが正しいのか、自分の看護観を相手に押しつけていないかなどを考えさせられる。本当はもっとたくさん伝えたいことがあったのではないかと感じさせる内容で、看護に携わるすべての人に読んでいただきたいと思う。

今後在宅において「看取り」が重点と考えられている。本書のなかに、訪問看護の対象だった療養者が行方不明となり、銭湯で身元不明者として発見された事例がある。が、この方にかかわっていた看護師、ケアマネジャーが事情聴取され、病気のことなどの情報がきちんと伝わり病死と判断されたが、「気持ちのよいお風呂で人目のあるところできちんとお世話をされて、迷惑をかけたけれどこの方らしかった」と述べられている。どのような「看取り」を推奨していいのかが難しい課題であるが、この事例のように、著者がその長い経験のなかでなければ語ることのできない「療養者や家族のこころ」がこの本には詰まっている。

教育現場においての教本は、いろいろな項目を入れ込み時代の流れに沿い、作成してある。在宅看護の理解が多くなっても学生に指導できるような形になっており、特に事例を盛り込んで、療養者や家族、またそこにかかわる看護師や他職種の思いや課題を提起している。しかし、それだけで学生とともに理解を深めていくにはやはり限界があるように感じる。外部講師として、現役の訪問看護師の講演を組み入れたりして、それぞれの看護教員は工夫を行い授業の展開をしていると思われる。

それらの工夫に加え、さらに在宅看護のイメージを湧かせるために本書は役立つものと思われる。